

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17300232
 研究課題名（和文） ニュータウン・大規模団地の地域住環境運営における中間集団の役割と可能性
 研究課題名（英文） The role and possibilities of intermediate groups for, community-management of existing new town and large scale housing complex.
 研究代表者
 篠原 聡子（SHINOHARA SATOKO）
 日本女子大学・家政学部・准教授
 研究者番号：20307987

研究成果の概要：大規模団地、ニュータウンにおける中間集団の実態を多角的に調査し、中間集団の、出入り自由な on/off 的な性質、対照的に集団の内外が明確な in/out 型の性格が抽出され、on/off 的な集団も、それが空間の実態を持つことで、安定的継続性を得る一方、in/out 型の性格を強くする傾向もみられた。また in/out 型の自治会のような集団が、in/out 的な緩やかな集団をつくる契機となること、またその逆のケースも散見でき、中間集団の多様なあり方や形成のプロセス、発展、継続の契機を抽出し、それらがニュータウン・大規模団地の地域住環境運営に果たす役割について明らかにできた。最終年度には、公開シンポジウム「集住とコミュニティコミュニティはデザインできるかー」を開催し、研究成果の開示、及び、広く意見の収集を行なった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	3,400,000	0	3,400,000
2006 年度	4,500,000	0	4,500,000
2007 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2008 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総計	13,200,000	1,590,000	14,790,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学

キーワード：中間集団、ニュータウン、大規模団地、住環境運営、共用空間、NPO、自治会、町内会

1. 研究開始当初の背景

戦後、都市近郊の人口増加を吸収するべく建設された多くの大規模団地やニュータウンは、計画的に短期間に建設された住空間であり、いまや建設後 40 年以上を経過したものも少なくない。時間の経過の中で初期に設定された環境は、居住者の生活単位である家族や地域社会のあり方が変化するに伴い、少子

化による人口減少、高齢化に伴う介護の必要性、単身者居住、階層分化、多文化混浴など、多くの問題を抱える空間となっている。

2. 研究の目的

しかし同時に、大規模団地やニュータウンは、居住者自身が生きる空間として現在も機能しており、そこで発生する諸問題に対応する

べく内発的な新しい組織や手法が試みられてもいる。本研究では、そのような内発的な対応技術を生み出す社会単位である、町内会、自治会、管理組合、NPO、テーマ別活動組織などを、公と私の間が存在する中間集団として捉え、以下の点を明らかにする。

- (1) 集団の規模、目的、構成、活動内容など、中間集団の実態を把握する。
- (2) 空間の供給主体や供給形態、立地条件により、中間集団の特性にどのような差異がみられるのかを明らかにする。
- (3) 中間集団が形成される契機となる問題の特性や時代背景によって、中間集団の性質にどのような違いが生じ、それがいかに変化するかを分析する。その際、より多様な問題解決手法を抽出するために、海外の関連事例を比較検討する。
- (4) 中間集団の住環境運営上の役割と将来的な可能性を明らかにする。

3. 研究の方法

各研究分担者が、それぞれのフィールドにおいて、中間集団の実態調査を行ない、年間2回程度の研究会において、調査内容の報告、及び、分析を行った。また、国内の事例を相対化する為に海外調査を行なった。調査内容はホームページ、及び、公開シンポジウム（「集住とコミュニティ—コミュニティはデザインできるか」—2008年10月19日於日本女子大学）開催において、開示するとともに、一般からの評価を仰いだ。

4. 研究成果

(1) 「ニュータウン・大規模団地における共用空間と中間集団形成の関係について」—篠原聡子

1962年より入居が開始された東京都北区の赤羽台団地における、共用空間の使用実態調査、居住者へのアンケート、聞き取り調査、および自治会機関紙「あかばね台」等の文献資料から、共用空間の空間的特質とそれに関わる中間集団の性格の違いが明らかとなった。宅配牛乳の拠点となっている牛乳センターは、5~6人がけの小さなテーブルが入るほどの極小の空間ながら、長年団地自治会室としての機能をはたしてきた。自治会という組織的な中間集団にとって、拠点的な空間が重要な役割を果たした一方で、中庭は散歩のような個人的な行為、夏祭りのような大きなイベントに対応する空間として、赤羽台団地への愛着を強め、団地住民という緩やかな中間集団を形成する役割をになった。集会室は、幼児教室のように自治会の組織的な活動に使用される一方で、「櫛の会」（高齢者の会）のような、中規模で出入りの自由な中間集団の活動拠点となった。中規模の中間集団の活動空間は、住戸での接客行為の滲み出

しともとれ、住戸空間の補完的な役割も担っていた。このことは、共用空間の有り様が、住戸のような私的領域との関係性で捉えられるべきであることを示唆している。その他、赤羽台団地での調査を相対化し、今後視野を海外へと広げて行く目的で、ソウル（上溪団地、高德団地）、台北（民生社区）においても調査を行った。とくにソウルにおける老人亭の調査では、年齢による同質集団が拠点をもつことによって、他の中間集団とのネットワークが形成される可能性にふれることができた。

(2) 「共にすむかたち—住コミュニティ成立要素構図と空間モデルによる考察—」—小谷部育子

ここで定義する「住コミュニティ」とは、住居学の視点から、生活の個人化が進む現代の成熟社会で、個がより良く生きるために他者と共有する価値と生活領域をもち、暮らしの運営に当事者として係わり維持、育てる、住まいを拠点とした集住の様態として定義づけている。集合が小さいほど、いわゆる家族を超えた他者との係わりを持つことによって生活領域が広がり、安心・安全で豊かさ、自己の可能性を実感できる暮らしが手に入る。コレクティブハウジングを中心とした共生型集住の研究・活動実践から得たことである。

本研究では、小規模の住まいからまちレベルまで、ひろく住コミュニティが成立していると認められる事例を収集し、設定した住コミュニティの成立要素構図と空間モデル試案を使って事例住コミュニティを分析しその特徴を読み取ることを試みた。

(3) 「ニュータウン・大規模団地の地域住環境運営における中間集団の役割と可能性」という科研の全体テーマの中で「ネットワーク媒体の変化と中間集団の変化を時系列に整理分析する」というテーマを分担してきて—西川祐子

高蔵寺ニュータウンで現在、古民家和っかという拠点を獲得して活発に活動を行っているNPO法人エキスパネット（代表治郎丸慶子、古民家和っかの館長：林明代）をニュータウンの中間集団の1つと捉えてこれにたいして住人インタビュー、イベントの参与観察、資料分析などを行った事例研究である。調査のあいだに次第にNPOの歴史的背景が浮かび上がり、時間軸をたて、媒体の変化を分析することにより、紙媒体『タウンニュース』（代表林明代他、現在は岡代表）、電子媒体の『かすがいエキスパネット』（代表：林明代）で蓄積してきた住人間の人間関係を資本として、今や行政、企業と対等に交渉し、住人の情報交換と交流のための喫茶店の開催、障害児を対象とした保育空間の運営、春日井市と提携した複数のイベント共催など

を行う実力をつけてきたこと、その間にゆるやかな世代交流、世代交代と継承がおこなわれてきたことが明らかになった。しかし紙媒体、電子媒体を用いた、ニュータウンの匿名的社会にふさわしい出入り自由な on/off のスイッチ切り替え型ネットワークであった組織は、現在、活動範囲がニュータウンの外部ににじみだし、行政や企業との提携主体となることによって、逆にコミュニティを代表する in/out 型組織とならざるをえないという一種の岐路にたっており、今後の展開から目をはなすことはできない。

(4)「NGO や家主協会などの中間集団による規則制定プロセスと資本の再分配のメカニズムについての考察」—森正美

台湾における住宅政策、住宅事情、ニュータウン開発の概要の把握および、国民住宅を中心とした住居内見学、住人インタビュー、住民組織である社区發展協会におけるインタビューを実施し、中間集団としての活動内容について調査した。またこれらの組織の活動が、住宅を中心とした地域共同体の住環境運営にいかに関与しているかを考察した。また韓国においても、各種の住宅地での中間集団の役割について調査した。さらに、フィリピンでは、民間分譲住宅地における住環境運営に果たす中間集団の役割を理解するために、家主協会の活動および住環境運営に関わる規則、規則制定プロセスについて調査した。ここからは経済格差が広がる社会において、国家が十分な役割を果たせない場合、中間集団が良好な住環境の維持に貢献すると同時に、社会的なセーフティネットの役割を果たしていることが明らかになった。同様に、貧困層への住宅供給とコミュニティ開発を主たる目的とする NGO の活動実態についても研究し、多国籍企業の CSR 活動をも取り込む形で資本の再分配が行われ、その結果貧困層にとっての良好な住環境の維持が可能になる仕組みが解明できた。

(5)「戸建て住宅団地における住環境運営を担う中間集団の実態と役割」—大月敏雄

日本には大小様々の戸建て住宅団地と称してよい、住宅群があり、戦後新たに建設された居住環境としては、その量的インパクトは相当に大きいといえる。

しかしながら、こうした一般的な戸建て住宅団地の、住環境運営にかかわる統計は皆無で、建築学・住居学の既往研究を眺めてみても、極めて個別的な事例研究しか蓄積されていない。

そこで、ここでは全国のまちなみづくりに精力的に取り組んでいる戸建て住宅団地 15 か所（住宅生産振興財団主催の「住まいのまちなみコンクール」受賞団地）を対象として、そこで行われている、団地空間の種別ごとの管理状態をヒアリング等を通して把握し、ど

のような中間集団が、どのような管理方法で、戸建て住宅団地の住環境運営にどのような役割を果たしているのかについて明らかにすることを目的とした。

調査、及び分析の結果、多くの団地において、やはり町内・自治会という中間集団が、住環境運営の要として認識される。ただ、その団地の持っているテーマによって、他の中間集団が形成されるケースも多い。たとえば、建築協定などをもっていけば、建築協定運営委員会という中間集団が、共有地などをもっていけば、管理組合という中間集団が形成される。このような、全員の運命共同体のような中間集団もあれば、地域の中で NPO 法人を立ち上げ、特定のテーマ（まちなみづくりや歴史の伝承など）に取り組むところもある。

また、住環境運営とは直接的に異なる中間集団、例えば、犬の飼い主の会などが、糞の始末に端を発し、地域の清掃グループとなるなどの事例が、数ヶ所にみられ、多様な中間集団の動機づけによって、町内会・自治会を中心とした従来の住環境運営を、連携補完するための組織づくりが、重要であるとともに、その下地がいずれの住宅地にもありうるだろうことが推察された。

また、この補足的研究として、ワンルームマンション、古い公団団地、ニュータウン、建て替えられた団地などにおける中間集団の活動の様子も、記録することができた。

(6)「民間大規模分譲集合住宅団地におけるコミュニティ形成に携わる中間集団の取り組み」—中村直美

現在、分譲集合住宅のストック総数は全国で約 528 万戸、うち築 30 年以上の集合住宅は、63 万戸にもものぼる。その多くは、居住者の高齢化に直面し、入居当初は活発であった自治活動や管理組合活動の継続が困難になる等、問題を抱えている。長期経過した分譲集合住宅にとって、いかにこれらの活動を継続、発展させ、コミュニティを醸成していくかは、重要な課題である。

ここでは、定住型住宅地を目指し計画され、今もなお自治活動、管理組合活動が盛んな民間大規模分譲集合住宅団地を事例に取り上げ、自治活動、管理組合活動に主体的に取り組む中間集団を対象に、アンケート調査、ヒアリング調査を実施し、活動を始めた経緯や活動内容、運営方法などの実態を把握することを目的とした。

調査、分析の結果、自治活動および管理組合活動を継続、発展させるためには、①活動の多くが、組合主導でなく居住者有志によって、始められていること、②個々の活動のみならず、異なる集団が連携した活動や、全集団共通のイベント活動が多いこと、③活動は団地内に留まらず、地域に開放したもの、近隣の学校施設と連携したものが多く、④

活動メンバーが固定化しないシステムを持つこと、等が有効であると考えられた。また、本調査対象団地において、団地に定住していく過程で多く見られた団地内での親族近居、転居」、住戸の買い増しという現象についても、記録することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①篠原聡子、小河麻衣子、田中みどり、小松崎七穂、丸山佳誉湖

「家族の中心である空白、中庭」新建築社『住宅特集』、4月号、pp.150-151、2009年、査読無し

②篠原聡子、小河麻衣子、田中みどり、小松崎七穂、丸山佳誉湖、

「家族をリセットする『装置』、中庭」新建築社『住宅特集』、3月号、pp.104-105、2009年、査読無し

③篠原聡子、「ミニ戸建開発で新しいコミュニケーションの形を提案する一隣接や集合にメリットを見出せる新しい関係／特集あらためて家族」、住まいと電化 Vol. 20、1月号、pp49-52、2008年

④森正美、「地域で学ぶ、地域でつなぐ—宇治市における文化人類学的活動と教育の実践—」、「文化人類学」72-2、2007年9月、pp.201-220

⑤篠原聡子、「住まいの集合にみる可能性／特集 都市をつくる最前線の集合住宅」、建築技術 No. 683、12月号、pp96-99、2006年

⑥篠原聡子、「住まいという親密圏の再構築にむけて／特集 新しい居住スタイル」、C E L Vol. 77、2006年6月、pp44-48

⑦篠原聡子、「デザイナーズマンションという戦略—小泉的なものの成功と限界」、新建築、8月号、pp.55-61、2006年

[学会発表] (計15件)

①中村直美、岡崎愛子、大橋寿美子、小谷部育子、「集合住宅団地の住み続けられる要因に関する研究—大規模分譲集合住宅団地における親族によるネットワーク居住の実態—」、日本建築学会 2008 年度大会学術講演梗概集 (中国) E-2 no. 5688pp. 267~268、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

②秋山友里、大月敏雄、深見かほり、「再定住事業後の住宅建設手法の検討—カンボジア・プノンペン郊外Samaki271 実態調査—」日本建築学会大会学術講演梗概F-1 分冊 pp.1487-1488、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

③塩見悟史、大月敏雄、深見かほり、「マンション建替え事業における居住者支援を行

うNP0の役割について—多摩ニュータウン諏訪2丁目住宅を対象に」、日本建築学会大会学術講演梗概F-1 分冊pp.1361-1362、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

④松井溪、大月敏雄、松本真澄、深見かほり、「日本住宅公団阿佐ヶ谷住宅の管理・運営の実態に関する考察」、日本建築学会大会学術講演梗概F-1 分冊pp.1355-1356、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑤大河原礼美、大月敏雄、深見かほり、「同潤会柳島アパートの建替後の町会組織活動に対する居住者の評価」、日本建築学会大会学術講演梗概E-2 分冊pp.309-310、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑥佐藤多恵子、大月敏雄、深見かほり、「東京における民間単身居住用集合住宅の推移—ビジネスマンションからワンルームマンションまで」、日本建築学会大会学術講演梗概E-2 分冊pp.253-254、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑦間瀬陽介、大月敏雄、深見かほり、「新聞記事にみるワンルームマンション問題の変遷に関する考察」、日本建築学会大会学術講演梗概E-2 分冊pp.251-252、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑧齊藤惇子、大月敏雄、齊藤広子、深見かほり、大河原礼美、「異なるアプローチ空間をもつ戸建て住宅地計画の居住者による評価」、日本建築学会大会学術講演梗概E-1 分冊 pp.9-10、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑨深見かほり、大月敏雄、齊藤広子、齊藤惇子、大河原礼美、「沿道型の植栽帯を有する戸建て住宅地における植栽管理を通じたコミュニティ形成」、日本建築学会大会学術講演梗概集E-1 分冊pp.5-6、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑩小谷部育子、大橋寿美子、岡崎愛子、川合敦子、「熟年コレクティブハウジングにおける住コミュニティの持続要件

(1)コレクティブハウス『フェルドクネッペン』における14年目の居住者像と居住評価から

(2)コレクティブハウス『フェルドクネッペン』における14年目の住運営活動から」、日本建築学会 2008 年度大会学術講演梗概集 建築計画Ⅱ272pp. ~275pp、2008年9月19日、広島大学東広島キャンパス

⑪西川祐子、「ニュータウンの記憶の行方」、日本都市社会学会第26回大会シンポジウム「郊外ニュータウン開発と地域の記憶—多摩ニュータウンを軸として—」、2008年9月14日、法政大学多摩キャンパス

⑫西川祐子、「近代家族の空間：男の家、女の家、性別のない部屋」大阪府立大学大阪府立大学女性学研究センター主催連続講座「家

族の空間／空間のなかの家族」第2回、2008年6月14日、大阪府立大学

⑬中村直美、岡崎愛子、大橋寿美子、小谷部育子、「定住型集合住宅団地における要件に関する研究－親族によるネットワーク居住の実態－」、日本家政学会第60回大会研究発表要旨集pp.96、2008年6月1日、日本女子大学目白キャンパス

⑭小谷部育子、大橋寿美子、岡崎愛子、深谷真理、

「居住者参加型の賃貸コレクティブハウジングに関する研究(3)(4)」

居住者の生活価値の認識に関する考察

(4)居住者の住運営活動への参加と意識の変容について、日本建築学会2007年度大会学術講演梗概集 建築計画Ⅱ 97pp～100pp、2007年8月29日、福岡大学 七隈キャンパス

⑮森正美、Tensions and Compromises of Legal Pluralism: Case Study from a Philippine Migrant Community in CD publication of THE XV INTERNATIONAL CONGRESS ON LEGAL PLURALISM、

Law, Power and Culture、2006年、インドネシア-ジャカルタ

〔図書〕(計2件)

①西川祐子、杉本星子、日本図書センター、『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ－鶴見和子文庫との対話・未来への通信』、2009年2月、p282

②篠原聡子、彰国社、「住まいの境界を読む 一人・場・建築のフィールドノート」、2007年10月、p240、新版2008年5月、p264

〔その他〕

①中村直美、岡崎愛子、大橋寿美子、小谷部育子、「定住型集合住宅団地における要件に関する研究－親族によるネットワーク居住の実態－」、日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科第15号pp.145-152

②森正美、「語ろう、榎島団地の将来像」『城南新聞』、2009年1月23日

③森正美、「府営住宅榎島団地未来志向のコミュニティにも」、『洛南タイムス』、2009年1月23日

④森正美、「初の福祉施設併用など提案」、『京都新聞』、2008年12月2日

⑤森正美、「地域開放型の住空間めざす－有職者でまちづくり懇話会」、『洛南タイムス』、2008年12月2日

⑥西川祐子、「現在と未来のための生活記録」、『京都新聞』、2008年1月28日、「フォーラム京」、pp11-11

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠原 聡子 (SHINOHARA SATOKO)
日本女子大学・家政学部・准教授
研究者番号：20307987

(2) 研究分担者

小谷部 育子 (KOYABE IKUKO)
日本女子大学・家政学部・教授
研究者番号：20178388

西川 祐子 (NISHIKAWA YUKO)
京都文教大学・人間学部・非常勤講師
研究者番号：50183538

森 正美 (MORI MASAMI)
京都文教大学・人間学部・准教授
研究者番号：00298746

大月 敏雄 (OTSUKI TOSHIO)
東京大学大学院・工学研究科・准教授
研究者番号：80282953

中村 直美 (NAKAMURA NAOMI)
日本女子大学・家政学部・助教
研究者番号：50386299